第一号壁

釈迦浄土図は釈迦説法図である。中央正面須弥座に結跏趺座し、与願・施無畏の印相を示す釈迦如来、左右に脇侍菩薩が片手に蓮華、片手に花皿や水瓶を持って蓮華座上に侍立する。三尊の左右に五人ずつ、十大弟子が立っている。上には天蓋の両側に飛天、下には供養台の左右に獅子が蹲踞する。向って左脇侍菩薩が持つ花皿は、それがガラス器であることを示す。

須弥座＝仏像を安置する座
結跏趺座＝足ぐみして安座すること
（僧侶がする特別な安座法）
印　相＝手の指での色々な組み方によって供花とか説法などの特別な意味をあらわすがこれを印相という
印相の数は多い
與　願＝字の通り願いごとを與える
施無畏＝佛教を信じることによって何ものをも恐れることのない　そんな心情へのほどこし
天　蓋＝安置する佛像や位高い僧侶の座する頭の上に吊された四角な覆い
飛　天＝雲上に飛ぶ天女の姿
脇侍菩薩＝佛の両脇に控える菩薩
菩薩とは道を求め大きな悟を求める佛の次に位するもの
侍　立＝そばに立つ
蹲　踞＝つくばいすわる

第二号壁

第五号壁とほゞ同形を裏返しした半跏像である。第二号壁はとくに保存がよく、小壁中随一であった。華足つきの円爾座に左脚を蓮華上に踏み下げ、右手を上げて第一指と第三指を捻じ、左手を下げて蓮華の茎をつまむ。

上に天蓋、下に水波と土坡がある。

半跏像＝片足を一方の足にかけている姿の像
円爾座＝円形のすわる座
この場合は華足づきとあるから今の椅子のようなもの
土　坡＝きしのつゝみ

第三号壁

観音菩薩、蓮華座に立ち、三面宝冠の正面宝飾に化佛をあらわす。左手を胸前にあげ、右手をさげて宝珠形の花の長い茎をつまむ。

胸飾、腰衣、裳、天衣、脚の運びなど、すべて第六

号壁の観音に一致しているが、位置は反対である。上に飛雲（ヒウン）を伴う火焔（カエン）宝珠、下に水波と岸の土坡（ドハ）があり、浄土における単独像であることを示している。

観音菩薩＝慈悲の徳をもつ菩薩
三面宝冠＝前と両横の三面に佛様などの姿を浮きぼりにした尊い冠
化　佛＝佛になること
腰　衣＝腰にまくころも
裳　＝腰から脚にかけてまとう着物
天　衣＝天人のまとう衣
火焔宝珠＝ほのおを発している珠

第四号壁

勢至菩薩（セイシボサツ）、三面宝冠の正面、宝飾に水瓶をあらわす以外は、第三号壁の観音菩薩とまったく裏返しの相似形をなす。また胸飾、その他第六号壁の勢至に一致しているが、位置は反対、橘夫人厨子扇（ブニン）絵の観音勢至もこれに類する。

勢至菩薩＝智慧の徳を持った菩薩
橘夫人厨子扇絵＝橘夫人とは皇明皇后のお母様
この方が佛教を信じ毎日礼拝していた佛だんは今も法隆寺の宝物の一つとなっていますがその佛だんの中に納められている佛像の絵

第五号壁

艶なるまでに明るい隈取りが柔肌（ニュウヒ）を匂わせ、蓮華座が華麗な雰囲気を盛り上げている。

第六号壁

第六号壁は阿弥陀浄土で、正面中央に蓮華座上、豪華な後廟（コウビョウ）を背にして阿弥陀如来が結跏趺座（ケッカフザ）し、轉法輪（テンホリン）の印相を示す。両脇には観音、勢至の両菩薩が蓮華座上に侍立する。

観音の宝冠には化佛（ケブツ）をあらわすが、勢至（セイシ）には水瓶（スイビョウ）がない。

観音は右手に帛片（ハクヘン）をつまみ、それから垂れる金鎖（キンサ）の端末（タンマツ）の帛片を左手に、蓮華とともに持ち、勢至は左手を上げ、右手に蓮華を持つ。

上には天蓋（テンガイ）、その他の空所には山岳、下には宝池（ホウチ）があ

り、蓮華化生の菩薩二五体が描かれている。いずれも片膝を立てるか、交脚する安楽座の姿勢をとっている。

下方は剥落がいちじるしい。天蓋の総が垂れているが、大部の壁が垂直に静止しているのに、この画では微風を思わすように総が揺れ動いている。

阿弥陀浄土＝未来の極楽浄土の一つ
転法輪＝説教のこと
帛　片＝布ぎれ
金　鎖＝きんぐさり
剥　落＝けずり落されること
化　生＝生まれかわり

第七号壁

聖観音像、姿態は第四号壁の勢至菩薩と同形である。下は蓮華座が岩盤に乗る形をとり、観音の補陀落山に立つ意味をもたせよともいう。

補陀落山＝印度の南海岸の地名、観世音菩薩のお住いになったところと言われている

第八号壁

維摩居士と問答する形の文珠菩薩、須弥座の上に胡座する文珠は、左手を前につき出し、第二指と第三指の二本を立て、右手を前におく。初唐の敦煌などに見る典型的な不二の問答形である。上に天蓋、台座の下に山岳の痕跡がかすかに見える。

維摩居士＝世俗にあって釈迦の教化を助け人…大居士
胡　座＝あぐら
敦　煌＝昔中国が唐の国と言われた時代の初め頃を敦煌の時代と言っている特に美術工芸の盛んな時で立派な佛像や佛画がつくられた

第九号壁

第九号壁は一般に弥勒浄土とされている。

中尊は薬叉の荷う六重八角の台座に結跏趺座し、脇侍菩薩が蓮華座上に合掌しながら侍立する。三尊の間に立つ羅漢は大迦葉と阿難であろうといわれる。さらに両脇に三神王ずつ相対する。前方両脇に金剛力士が立ち、左側のものは空拳を振りあげ、右側のものは金剛杵を持つ。

弥勒浄土＝未来浄土の一つ
中　尊＝中央に位している尊い佛体
この場合三尊の中尊は阿弥陀女来

薬　叉＝夜叉ともいう　暴悪で勇健の恐しい鬼のことで後に佛教に帰依して諸天を護ったという
羅　漢＝煩悩を絶ちきった修業者
大加葉
阿　難　＝ともにお釈迦さまのお弟子
金剛力士＝お釈迦さまのそばでおつかえした力持ち

第十号壁

第十号壁は一般に薬師浄土とされる。

正面中央に中尊が獅子を配する須弥座に倚座(キザ)し、右手をあげて第一指と第三指を捻(ネン)ずる印相、左手は膝上におき、透明な宝玉を掌(テノヒラ)にのせている。掌の線が珠を透いて見える。

両脇には日光・月光の両菩薩が蓮華座上に侍立し、その外側に一体ずつ描かれる菩薩像は、薬師本願経に説く八大菩薩の代表か、という。三尊の間に羅漢が見えるが、これも阿難と舎利弗(シャリホツ)にあてている。

左右の菩薩の背後(ハイゴ)に神王が二体ずつ描かれている。紐飾つきの冠をつけ、細くはね上る髭(ヒゲ)をつけている。前方の両側にも紐飾つきの冠、髭その他に同じ扱をしている。

神王が立っているが、空拳を振り上げ、金剛力士と見ることもできよう。

倚　座＝（坐法の一つ）

第十一号壁

普賢菩薩(フゲンボサツ)の来儀像(ライギゾウ)、釈迦如来にたてた誓いの通り、五百年後に東方より白象に乗って到来する姿で右手を上げて第一指と第二指を捻じ、左手は下げて宝相華(ホウソウゲ)の茎をつまむ。

白象は堂々として蓮華をふみ、西に向って進む。口にくわえた宝相華が上に伸び、もう一本の鼻にからんだ茎は、蓮葉をつけながら後に蓮華を付け、普賢の左足にのせている。上に火焔宝珠、下に山岳がある。

天蓋の総が後になびいて、象の走る勢いを思わせる。普賢の腰帯や天衣も翻(ヒルガエ)っている。

普賢菩薩＝増益延命（益を増やし命を延ばす）の徳をもっている菩薩

第十二号壁

十一面観音、正面形で聖観音と同じく身光を持ち、岩盤上の蓮華座に立つ。左手をあげて、蓮華をつまみ、右手を下げて左腰から垂れる金瓔珞（コンヨウラク）の端末をとる。

姿態は薬師寺の聖観音像、敦煌（トンコウ）の観音菩薩像に類する。

金瓔珞＝金色のたまをつないだ飾りふさ

木造　天部立像

九八・〇cm

桧材　一木割矧造り　彫眼

単髻（たんけい）を結び、著甲（ちゃくこう）し、左手で戟（げき）を執り、岩座に立つ天部立像である。

桧の一材から頭体（とうたい）の幹部を彫出し、耳後を通る線で前後に割り矧（は）ぎ、内割（くり）を施し割首とする。それに両手、両足を矧ぎ付ける。

慎目（しんめ）の忿怒（ふんぬ）相を示すが、その表情は穏やかで、体躯の肉付けもおとなしい。

静的な情緒の漂う平安時代後期の作品である。

木造　地蔵菩薩立像

六五・〇cm

桧材　寄木造り　彫眼

左手に宝珠を捧げ、右手は与願印（よがんいん）とする地蔵菩薩立像である。

桧材を用い頭体とも前後の二材矧（は）ぎとし、それに両肩以下を矧ぎ付ける。

面貌は細かく刻み、体躯をうすく衣文（えもん）の彫りも浅い。

瞑想的な表情を示す平安時代末期の作品である。

木造　僧形坐像

三四・五cm

一木造り　彫眼

木心を含んだ一材から頭躰（とうたい）の全てを彫り出した像である。

木心を含み、体躯の厚みが比較的少ないことから、あるいは神像かもしれない。とすれば、僧形八幡像か。

衣文の彫りに鋭いところが見られ、かつ、衣がそれ程厚みをもたないことから、鎌倉時代後期の製作と考えられる。